

「合気道、護身切に」～競わない強さ～

○ 梗概

高校で最後の写真部員である澤野にこ（18）は、存続危機にある合気道部の取材を始める。勝敗のない「演武」を主体とする合気道に最初は戸惑いながらも、部長の吉野空（18）、真面目な伊藤陽翔（17）、憧れの先輩を追って入部した新入生・三崎紗凧（16）らと出会い、その魅力に引き込まれていく。一方、合気道部は柔道部からの圧力に晒され、道場の使用時間すら奪われていた。柔道部部长・脇谷透（18）の挑発の一方で、顧問の和田大地(35)はかつて合気道で心を救われた経験から、生徒たちを静かに支え続けている。和田自身も病を抱え、部活指導はままならない。それでも、にこはレンズ越しに彼らの「争わずに強くある姿」を見つめ、次第に心を動かされていく。にこの幼馴染で新聞部部长の高木琉生（18）も、また部活の最後の一人。彼の兄は過去に合気道の受け身で肩を壊し、それ以来、高木は合気道に嫌悪感を抱いていた。だが、真摯に稽古に励む部員たちと、それをカメラに収めるにこの姿に触れ、次第にその頑なな心が揺らいでいく。合気道部は廃部回避の最後の手段として、演武会への出場を決める。だが、中心となる紗凧は、憧れの吉野を本気で投げることに躊躇していた。和田の「信じて投げることも護身」という助言に背中を押され、紗凧は仲間を信じて立ち上がる。迎えた本番、身長の高い紗凧の投げと、吉野・伊藤の流麗な受け身が織りなす演武は観客を魅了。その美しさと迫力はSNSで拡散され、合気道部の評価は一変する。高木も兄との過去を乗り越え、精緻な記事を書き上げる。演武会後、生徒たちは確かな手応えを得る。そして春、新たな道場では紗凧と伊藤が新入生の前で演武を披露していた。にこが残した写真と共に、確かに「護られた場所」は生き続けている。争わずに守ること。これは、そんな高校生たちの「護身切＝争わずに守る心」による青春群像劇である。

○ 登場人物

澤野 にこ (18)写真部3年
高木 琉生 (18)新聞部3年
和田 大地 (35)合気道部顧問
吉野 空 (18)合気道部3年
伊藤 陽翔 (17)合気道部2年
三崎 紗凪 (16)合気道部1年
脇谷 透 (18)柔道部3年

教師
柔道部員A
柔道部員B
アナウンス
観客A
観客B
生徒A
生徒B

○西多摩高校・柔道場(夕)

静寂な柔道場内。

窓から見える季節は秋である。

薄い西日が畳に伸びる。

わずかな風が道着の裾を揺らす。

吉野空(18)が伊藤陽翔(17)を投げる瞬間、伊藤は美しく受け身を取り、畳が重たく鳴る。

ファインダー越しにそれを捉える澤野にこ(18)。

ピントが鮮やかに合い、シャッター音が鳴る。

にこ「(小さく感嘆)……すごい」

隣に正座する三崎紗凧(16)が、目を輝かせながら先輩の動きを見つめている。

紗凧「(興奮気味に)ああ、先輩。カッコいい」

吉野が伊藤を軽々と投げ飛ばしていく。

畳に響く音が規則正しく続く。

にこ「これが合気道。思ってたより迫力あるわね。すごい」

紗凧「(うつむいて)……でも、廃部なんですよ、部活」

にこ「(カメラを下ろして)そうなのよね」

紗凧「今度の演武会が最後のチャンスなんです。部の存続をかけて…」

練習を終えた吉野が、タオルで額を拭きながら近づいてくる。

吉野「お疲れ。撮影は順調？」

にこ「バッチリよ。想像よりずっと絵になるわね、合気道って」

吉野「だろ？ 見せる側も、意識はしてるつもりさ」

紗凧がそっと吉野にスポーツドリンクを差し出す。

紗凧「先輩、どうぞ！」

吉野「ありがとう。俺たちは、この部を何としても残したいんだ」

にこ「うん」

吉野「先輩たちが繋いできてくれた場所、俺たちの居場所だから」

にこ「うん、気持ちは伝わってくるわ。よかった。私も撮影しがいがあるわ」

と、柔道着姿の脇谷透(18)が道場に入ってくる。

背後に数名の柔道部員も控えている。

脇谷「終わったか？ そろそろ、邪魔なんだけど」

伊藤「(声を荒げ)今、練習中です！」

脇谷「試合もないくせに？ こっちは大会前なんだよ」

吉野「すまない。すぐに道場を空けるよ」

伊藤「(食い下がりながら)先輩！」

吉野「揉め事は意味がないよ、伊藤」

にこがカメラを肩にかけ直し、視線を落としながら小さくつぶやく。

にこ「……悔しくないのかな」

○学校・道場外(夕)

道場の外。

柔道部の掛け声が遠くに響く。

夕日が西の空を橙色に染めている。

にこ、吉野、伊藤、紗凧の4人が並んで腰掛けています。

にこ「ねえ、試合がないって本当なの？」

伊藤「おす。合気道は競い合わない。そういう武道なんです」

にこ「競わない？でも、強さって、勝つとか負けるで測るものじゃないの？」

紗凧「私も最初はそう思っていました。でも、違うんです」

伊藤「合気道は相手を倒すんじゃなく、相手と調和する武道なんです」

にこ「調和？さっぱり意味がわからないわ」

伊藤「だから争いではなく、演武で技を見せます」

にこ「演武……じゃあ、あの投げ技も全部決められた動きってこと？」

吉野「型はあるけど、完全なやらせじゃない」

にこ「そうなの？」

吉野「受け身の美しさも含めて、お互いに技を磨き合うものなんだ」

にこ「なるほどね。正直、合気道が流行らない理由がちょっと分かった気がした」

吉野「だからって記事に変なこと書かないでくれよ」

にこ「記事は写真部じゃなくて新聞部が書くのよ。琉生(るい)が」

吉野「高木琉生君か。彼は写真は撮らないの？」

にこ「琉生はポートレート専門。動く被写体は苦手なのよね」

吉野「そうか。彼も君も演武会は取材してくれるんだろ？」

にこ「もちろん。それが、私がここにいる意味よ。だからちゃんと、いい写真を撮るわ。ただし」

吉野「ただし？」

にこ「フルネーム禁止。にこでいいから」

吉野「了解、にこ君。よろしく頼むよ」

にこ半ば呆れたように笑い

にこ「クンは、取れないのね」

4人の笑い声が静かに響き、ゆったり

と夕暮れが包み込んでいく。

○学校・写真部・放課後（夜）

放課後の薄暗い部室。

にこがパソコンの前で撮影したばかりの写真を確認している。

画面には伊藤が宙を舞う決定的瞬間が美しい構図で決まっている。

にこ「……いい写真」

静かにドアが開く音がして、高木琉生（18）が顔を覗かせる。

高木「いたいた。まだ残ってたのか？」

にこ「もう、いつもいつも、いきなり来ないでよ。心臓に悪いわ」

高木「相変わらず真面目だな、お前。で、合気道部の取材はどう？」

にこ「（モニターから目を離さず）思ったより、ずっと見応えあるよ。力強いだけでなく、華麗なのよね」

高木「はは、意外とハマってるじゃん」

にこ「百聞は一見に如かずってね。これ写真部のモットーよ」

高木「正直、あいつらちょっと変わってるだろ？」

にこ「(肩をすくめて)まあ、個性的ではあるよね」

高木「各学年1人ずつの超弱小部だし」

にこ「うん」

高木「道場の使用権も柔道部に押さえられてるし、顧問の先生ももろくに来ないしさ」

にこ「……顧問って和田先生だよね？ってか随分詳しいのね、琉生」

高木「影の副教頭の和田先生。存在感は薄いけどな」

にこ「なぜ和田先生が副教頭か、学校の七不思議の一つなのよね」

高木「で、さ。俺、ああいうの…正直、嫌いなんだよ」

にこ「え？何が？」

高木「護身術だって言いながら試合もない。戦わないのに強いっててさ。一体何？って思うよ」

にこ「……うん、まあ、それはわからなくもないけど」

高木「俺たち新聞部も写真部も今年で正式に廃部が決定してるのにさ」

にこ「それはそうだけど、それとこれとは関係ないんじゃない？」

高木「いや、あるよ。あいつらは勝手に、まだ希望持って頑張ってる。なんか、ムカつくんだよ」

にこ「……それ、ヒガミじゃないの？」

高木「ああ、ヒガミだよ」

しばし沈黙することに高木。

高木「(わざと明るく切り替え)だからさ、最後の仕事だよ。俺たち新聞部にとっては」

にこ「仕事？」

高木「合気道部を盛り上げてやるのさ。派手にな」

にこ「え？」

高木「盛大に持ち上げた方が、廃部決定の落差が面白いだろ？」

にこ「(呆れて)ホント性格悪いなあ。私は、真剣にやってるのよ」

高木「俺だって本気だよ。なんてね」

笑う高木。

だがにこの表情にはわずかな曇りが残る。

○学校・廊下

窓際の光が眩しく差し込む。

にこがカメラを首から提げて廊下を歩いている。

職員室の前に差し掛かり、少し迷いながらノックする。

にこ「(小声)失礼します」

○学校・職員室

静まり返った職員室。

パソコンのキーボード音とコピー機の作動音だけが鳴っている。

教員たちは誰もにこに目を向けない。

にこ「(やや声を張って)和田先生、いらっしゃいますか？」

教師「(デスクから顔を出して)ああ、今日はお休みだよ」

にこ「あ、そうですか」

教師「最近、体調が悪くてね。明日も来れるかわからないそうだ」

にこ「(がっかりして)わかりました」そっと頭を下げ、静かに職員室を後にする。

その背中に、教員たちは誰も関心を向けない。

○学校・道場の外(夕)

道場裏のベンチに、にこ、伊藤、紗凧が並んで座っている。

柔道部の掛け声が遠くから聞こえてくる。

にこ「……吉野は？」

紗凧「(寂しげに)進路指導だそうです」

にこ「そうか、ま、私たち三年生は忙しいからね」

紗凧「先輩が卒業するなんて、全然実感湧きません」

にこ「紗凧ちゃんって、吉野のこと好きなんだ？」

紗凧「(顔を赤らめ)え、えっと……その」

伊藤「三崎は吉野先輩に憧れて合気道部に入部したんです」

紗凧「……尊敬してます」

にこ「(微笑んでカメラを構える)その気持ちわかるよ。いい顔してる」

シャッター音が響く。

柔道部の声が聞こえてくる。

にこ「あれ？また追い出されたんだ？」

伊藤「わざわざ争わない。それが合気道の教えです」

にこ「でも悔しくないの？いつも、邪魔者扱いされて」

伊藤「おす。僕は合気道が武道であると思っていますし、誰にとっても邪魔者だと思っ

にこ「そっか」

伊藤「それに、柔道部に負けているとも思っていない」

にこ「じゃあ、次また絡まれたら投げ飛ばしちゃえば？」

伊藤「そんなこと、できませんよ」

にこ「なんで？やっぱ弱いから？」

紗凧「和田先生に厳しく言われてるんです。喧嘩をすれば即退部って」

にこ「……顧問の和田先生が？」

紗凧「はい。あまり部活に来ないけど、そこはすごく厳しくて」

伊藤「廃部寸前の今、誰かが退部なんて絶対できませんから」

にこ「……なるほど。難しい世界なのね」

○学校・職員室(夕)

放課後、静かな職員室、コピー機の音だけが響いている。

にこがそっと扉を開け、中を覗く。

にこ「(小声で)失礼します」

奥のデスクで和田大地(35)が書類に目を通して

和田「やあ、どうも。写真部の澤野さんだったかな？」

にこ「え、あ、はい。覚えてくださってるんですね」

和田「一応、副教頭でもあるからね。影のだけど」

互いに笑う和田とにこ。

にこは深呼吸をして、和田の側に立つ。

和田「で、今日は？」

にこ「合気道部の取材で演武会を前に、ぜひお話を伺えたらと思って」

和田「正直、取材されるような活動はできていないんだが」

にこ「部の存続が危ういって聞いています」

和田「そうだね。生徒数、活動実績、あらゆる意味でギリギリだ」

にこ「でも和田先生が顧問ならば」

和田「残念ながら、副教頭とは言っても、体調に不安があってね。今後も部活に出られるかは分からない」

沈黙の後、にこが少し思い切った表情で、

にこ「先生にとって合気道って何ですか？」

和田「逃げ場所かな。僕にとっては」

にこ「え？逃げ場所？」

和田「学生時代、僕は何をやっても中途半端でね。だけど合気道だけは、僕を裏切らなかった」

にこ「裏切らない、ですか」

和田「合気道は倒さなくてもいい。競わなくてもいい。『ここにいてもいい』場所なんだ」

にこ「なるほど。私も逃げ場所、必要だなんて思います」

和田「部員にとっても、部活がそういう場所で会ってくれればいい」
にこ「確かに、写真部も私にとってはそんな場所かもしれません。部活がなかったら学校辞めてたなっと思うし」
和田「だからこそ、守りたいんだ。それが僕の合気道部への思いかな」
にこ「私は、最後の写真部員なんです。後輩がいなくて結局、部活を残せませんでした」
和田「そっか。でもきっと行動してきたことは残るから」
にこ「ん？行動してきたこと？そういうもんですかね」
和田「そうだよ。行動は裏切らない。あと、部活の取材はどんどんしていいからね」
にこ「はい。ありがとうございます。失礼します」
職員室を出て行くにこ、その背中をにこやかに見送る和田。

○学校・柔道場(夕)

吉野・伊藤・紗凧が集中して練習している。
にこはカメラを構えながら見守る。投げ、受け身、流れるように繰り返される動作。
和田は、少し咳き込んで、
和田「三崎さん。無理に力を入れすぎない方がいいよ。流れを止めず、相手の受けを導くんだ」
紗凧「はいっ！」
脇谷が道場を覗きに来る。
嫌味な笑みを浮かべ、道場の隅に立つ脇谷。
脇谷「おお、やっぱキレイなもんだなあ。安全第一の演武練習は」
伊藤「……ム」

吉野「練習時間はまだ残ってるはずじゃないか？」

脇谷「まあ、気にすんな。うちは試合が控えてるからさ。喧嘩でもして、お互い怪我はしたくないもんな」

和田「脇谷君、無用な挑発は慎みなさい」

脇谷「いえいえ、挑発だなんて、和田副教頭先生」

不穏な空気が走るが、和田が柔らかに制し、練習は再開される。

○学校・写真部(夜)

にこが今日の練習写真を確認している。

モニターに紗凧が伊藤と吉野を投げる姿が美しく映る。

にこ「これも、いい写真」

と、そこに高木が入ってくる。

高木「(部室の扉に寄りかかりながら)いつもながら熱心だな、お前は」

にこ「まあね」

高木「(モニターを覗き込みながら)技は、たしかに面白い。派手でもあるし。時にかっこいい」

にこ「でしょ？ 私にとっても最後の仕事だからね。しっかりやるわよ」

高木「最後のね。廃部になったら全てなかったことになるだけだよ」

にこ「そんなこと、ないわ。行動したことは、残るのよ。そう、多分」

高木「俺たちが頑張っても、来年には何もかも、キレイさっぱりなくなってる」

にこ「合気道部にはまだ希望があるわ。彼らはとっても強いしね」

高木「強い？ そうかな？」

にこ「競わないだけよ」

高木「でもな。結局は競わないことで正当化してるだけに見えるんだよ、俺には。争いもしないのに、強いなんて言えない
と思わないか？」

にこ「琉生は、なんか、やたら合気道に厳しいのよね」

高木「実はさ……俺の兄貴が、昔、ここの合気道部にいてね」

にこ「は？」

高木「受け身の失敗で肩を壊した。もう元には戻らない」

にこ「お兄さんって3つ上だったよね。肩の怪我なんて聞いてないわよ？」

高木「見た目にはわからないからな。知っているのは家族と学校と、顧問の和田先生ぐらいだよ」

にこ「そんな」

高木「安全だ安全だって言いながら、結局怪我人が出る遊びなんだよ」

にこ「遊びじゃないでしょ。一応、武道なんだから」

高木「和田先生は償いとか言って、今でも遊んでんのさ。道場で」

にこ「だから潰したいの？合気道部を」

高木「違う違う。潰せないから苛立ってるだけだよ」

にこ「じゃあ、合気道部を盛り上げるって言うのは、どういう意味なの？」

高木「それはそれ、これはこれさ」

にこ「はい？」

高木「でもお前が夢中で写真撮ってる姿見るとさ、少し揺らぐよ、正直」

にこ「私に写真を撮らせといてよく言うわね」

高木「性格悪い、だろ？」

と高木は笑い、にこは高木を睨んでいる

○学校・柔道場

放課後、畳の上で、吉野・伊藤・紗凧が集中して演武の練習を続けている。

にこはファインダーを覗き込みながらシャッターを切っていく。

シャッター音が響く。

和田「三崎さん、もう少し呼吸を整えて。投げる時は力よりも流れを意識して」

紗凧「はいっ」

伊藤が起き上がり、軽く首を回す。受け身の負荷がじわじわ蓄積している様子。

伊藤「おす。もう一回お願いします！」

吉野「無理すんな」

紗凧「私も、まだいけます！」

練習は続く。

道場の隅で和田が咳き込んでいる。

○同・練習場の外

柔道部の部員たちが廊下から道場の中を覗いている。

脇谷が中心に立ち、腕を組みながら見下ろしている。

柔道部員A「結構やるじゃないっすか、あの小さい1年生」

柔道部員B「でもまあ、ヤラセの演武だからな」

脇谷「ふーん。あいつらに、あんまり出しゃばられても困るんだけどなあ」

脇谷のニヤニヤした表情。

○学校・柔道場

和田を中心に、吉野・伊藤・紗凧が練習をしている。

練習が一段落ついて道場の戸が開く。

脇谷が偉そうに入ってくる。

脇谷「さて、そろそろ交代してくれるか？」

吉野「(時計を見て)あと30分は練習時間のはずだが？」

脇谷「俺たちはさ、試合前なんだから。優先してくれよ」

伊藤「勝手なこと言わないでください！」

脇谷「お前らは所詮、試合もない護身術なんだろう？遊びならでてけよ」

脇谷と伊藤の睨み合い。

和田「脇谷君。今の発言は行き過ぎだ」

脇谷「先生、僕は事実を言ってるだけです」

和田「それが事実かどうか、少し確かめてみようか」

場が静まる。

和田「吉野君。脇谷君を投げられるか？」

吉野「(驚きつつも、すぐに表情を引き締める)はい。もちろんです」

脇谷「先生、こっちは大会前なんでね、怪我したくないんですけど」

和田「怪我しないように受け身を取ればいい。君は柔道部の部長だろう？」脇谷が舌打ちしながら畳に上がる。

一同、息をのむ。

にこ「(ファインダーを覗きながら)これが、護身なの？」

脇谷が掴みにかかる瞬間、吉野がわずかに回り込み、身体の軸を崩す。一瞬で技が決まり、にこのシャッターは

脇谷の驚きの表情を捉える。

脇谷の身体が宙に舞い、かろうじて受け身をとる。

畳にドスンと重い音が響く。

にこのシャッターが連続で音を立てる。

脇谷「ぐっ」

流れるように、絞技に入る吉野。

脇谷はたまらずタップする。

和田「いい受身だったな。武道は相手を決して侮らない。柔道も合気道も同じだ。心しなさい」

脇谷「わかりました」

柔道部員たちも静まり返って見守っている。

和田「では柔道部の皆さん、お待たせしました。こちらは引き上げます」

立ち去る合気道部員。

○道場・外(夕)

にこ、吉野、伊藤、紗凧、和田が並んで歩く。

夕暮れの風が道着をそよがせる。
にこ「すごかった。けど、いいんですか？あんなことして」
和田「心配はいらないよ。全責任は僕が負う。だが、必要な教育だった。僕は教師だからね」
にこ「それにしても、柔道部の部長を本当に投げられるなんて」
伊藤「スカッとしました！」
紗凧「先輩、本当にかっこよかったです！」
和田「僕は、合気道は最強だと思ってる。だが、その最強とは、突き詰めると争わない強さだ」
にこ「争わないから、負けない？」
和田「そう。合気道は逃げじゃない。信じて投げるといふ最大の勇気だ。だから君たちは、合気道部を恥じることはないんだよ」
吉野「でも、僕たちは、廃部が決まれば居場所を失います」
和田「まだ希望は捨てない。演武会で示そう、君たちの最高の護身を」
伊藤「護身、部活を守るのも。なら、僕たちにできる最高を、見せます！」
紗凧「私も、やります！たくさん投げます！」
和田「小柄な三崎さんを中心に組む演武をやれば、きっと注目を集めるはずだ」
にこ「任せて。私は、最高の写真、撮るから」
ファインダーを覗くにこ対して、皆が決めポーズをしてシャッターが切られる。
楽しげな一枚が表示される。

○学校・柔道場

放課後である。

紗凧が吉野を投げる練習を続けているが、どこか動きが硬い。

受け身の吉野もそれを感じ、首をかしげている。

吉野「三崎。どうした。大丈夫か？」

紗凧「……すみません、先輩」

和田「焦らなくていいぞ」

紗凧「はい、でも、その」

吉野「どうした？何が引っかかってる？」

紗凧「私……本気で先輩を投げるのが、怖いんです」

和田「なぜ？」

紗凧「だって、憧れの先輩ですから。ずっと背中を追いかけてきたんです」

吉野「俺を？」

紗凧「なのに私が、先輩を力一杯投げ飛ばすなんて」

吉野「三崎。この練習は、君と僕で戦ってるわけじゃない」

紗凧「でも、力が入るたびに壊しちゃうんじゃないかって思っちゃうんです。過去に合気道部で怪我をする事故があったって」

和田「三崎さん。合気道の護身は、ただ自分を守ることじゃない」

紗凧「え？」

和田「相手も壊さないよう導くことだ。信じて投げることも護身だよ」

紗凧がはっと息をのむ。

吉野「僕は、三崎に投げてもらいたい。演武は僕たちの信頼の形なんだ。僕を信頼できないかい？」

紗凧「そ、そんなこと」

伊藤「おす。僕たち、何百回だって受け身取りますから！」

紗凧の目にうっすら涙が浮かぶ。

紗凧「……はいっ！ 全力で投げます！」

にこ「(カメラ越しに微笑みながら)紗凧ちゃん、いい顔になってきたね」

○学校・屋上・同日(夕)

夕暮れの空の下、にこと吉野が並んで腰掛けている。

吉野が静かな表情で遠くを見つめている。

吉野「……正直言うとさ、俺も怖いんだよ」

にこ「え？」

吉野「優等生だの、部長だのって言われるけどさ」

にこ「うん」

吉野「俺だって、部活が消えたら、自分が何だったのか分からなくなりそうでさ。俺の3年間はどうなっちゃうんだろうって」

にこ「合気道が居場所なんだね。私にとっては写真部がそう」

吉野「最後の写真部員なんだよね」

にこ「それでも私の居場所なんだ」

吉野「合気道部がなきゃ、自信なんて俺にはなかったよ。三崎や伊藤が入ってくれたのも嬉しかったけど、誰よりも俺がこの部を必要としてる。間違いないね」

にこ「部長って、そういうものかもね。わかるよ」

吉野「俺、実は子どもの頃、親父に柔道やらされてたんだよ。弱くはなかったんだけど、でも嫌でさ」

にこ「え？うそ。じゃ柔道部の脇谷を投げられたのも？」

吉野「ある意味チートみたいなもんだよ。でも俺は投げるのも、倒すのも、勝ち負けも、好きじゃなくて。柔道は辞めちゃった。だけど合気道は、違ったんだ」

にこ「争わないから？」

吉野「競わないけど、高め合うことはできる。だからこそ、居場所だったんだ、俺には」

にこ「やっぱり合気道って奥が深いわね」

吉野「だろ？」

にこ「こんなに強いのに勝ち負けは決めないって、不思議」

吉野「だから好きなんだ。合気道が。負けない自分を作る。それが合気道部のモットーさ」

にこ「そっか。いいね。そのモットー。いよいよ、合気道部も最後の演武会ね」

吉野「うん。でもね、演武会は終わりじゃなくて、最高の証明にしたいんだ。俺たちの青春は無駄じゃなかったってね」

にこ「わかった。きっと大丈夫。私も写真で証明する」

吉野「頼りにしてるぜ。にこ君」

にこ「にこ君はやめてってば」

思わず吹き出すにこ。

○学校・道場外(夜)

和田とにこが帰り際に立ち話をしている。

和田「彼らも随分と成長したな」

にこ「はい。本当に。素人の私がみても、上達したってわかります」

和田「きっと、いい演武になるな」

にこ「私が、全部を撮ります」

和田「期待してるよ。君の親切心と護身術。言わば、護身切にね」

にこ「護身切……って、なんですかそれ？あはは」

和田「護身切。ま、争わずに守る心だね。自分も相手も傷つけず、信じて支えることだよ。君の合気道部への親切は、まさに護身切だ」

にこ「護身切。なんか気に入りました」

笑い合う、にこと和田。

○学校・写真部(夜)

にこが練習写真を整理している。

ファインダー越しに捉えた紗凧の躍動感。

にこ「ここまできたんだもん。彼女はもっと上手くなる」

画面の片隅に小さく映る吉野の笑顔も、柔らかい光に包まれている。

にこ「私も本気出さなきゃ」

○学校・道場(夜)

演武会の前夜である。

整列し正面に向いて正座している吉野・伊藤・紗凧。

吉野「黙祷！」

3人が静かに目を閉じて黙祷をしている。

柔らかな月明かりが差し込む道場内。

吉野「やめ！」

全員が目を開け、吉野が3人と向き合うように座り直す。

吉野「いよいよ明日が本番だ」

伊藤「おす。悔いのないようにやりきります」

紗凧「私、大丈夫でしょうか？」

吉野「三崎。お前が中心の演武だ。これだけ修練を積み上げたのは自分だろ。自信を持っていい」

伊藤「三崎なら大丈夫です。僕ら、何百回も技を受けてきましたから」

紗凧「(力強く頷き)……はい！」

○学校・柔道場(夜)

道場では最後の確認練習が行われている。吉野、伊藤、紗凧、和田が練習を繰り返す。

吉野「これが最後の通しだ」

伊藤「おす。やっぱ緊張しますね」

紗凧「私も。でも……投げます。先輩たちを信じて」

吉野「三崎、よくここまで来たな」

紗凧「……吉野先輩。先輩のこと…本当に尊敬してます」

吉野「(柔らかく頷き)ありがとう」

伊藤「これって、なんかもう、告白みたいですね」

紗凧「ち、違いますって！」

3人で笑い合う。

和田「それでいい。演武は戦いじゃない。信頼を投げ合う儀式だからな。よし、最後までやり切ろう」

吉野・伊藤・紗凧「はい！」

○学校・職員室(夜)

薄暗い職員室の窓の外には夜の星が浮かぶ。

和田がデスクに一人座り、書類を静かに閉じる。

そこにそっと入室してくるにこ。

にこ「和田先生」

和田「遅くまでご苦労さま。ん？どした？」

にこ「お礼が言いたくて」

和田「お礼？」

にこ「演武会、出場できるのは先生のおかげです。おかげで私も最後の仕事ができます」

和田「僕は何もしていないよ。君と、あの子たちが必死にここまで来たんだ」

にこ「でも先生が守ってくれたから、この居場所が残ってると私は思ってますありがとうございます」

和田は少し驚き、優しく微笑む。

和田「ありがとう。……僕も守られてるのかもしれない、あの子たちに」

にこ「明日、最高の演武を写真に撮りますから」

和田「期待してるよ」

にこ「じゃ。護身切に！」

和田「護身切に」

にこは深く頭を下げる。

静かに退出する彼女の背を、和田は優しく見送る。

秋の虫の音が鳴っている。

○学校・写真部(夕)

にこが写真整理をしている。

演武練習の集大成となる写真群。

紗凧の成長が、伝わってくる写真。

にこ「……みんな、確実に上手くなってる」

と、そこに高木が入ってくる。

高木「お前、今日もずっとここか」

にこ「(微笑んで)準備は大事でしょ。明日は本番だから」

高木「演武会の取材が、俺たちの3年間の集大成ってわけだな」

にこ「そうね」

しばしの沈黙。

高木「にこ。もしさ、明日、大きな事故が起きたら、お前どう思う？」

にこ「合気道部員が怪我するって？ないわよそんなこと」

高木「どうしてそう言い切れるんだよ。あるかもしれないだろ」

にこ「何度も言わせないで。あれだけ丁寧に丁寧に練習してきたのよ。誰も怪我しない。私はそう信じてる」

高木「俺もそう思いたいけど……だけど、俺は俺で、兄貴のことが頭から消えないんだ」

にこ「そう、よね」

高木「それでも兄貴は、合気道が今でも好きなんだ」

にこ「そうなの？」

高木「だからこそ、逆に、俺は許せなかった」

にこ「それで、どうしたいの？」

高木「今さら止めようとは思わないよ、でもやっぱり、心から、応援する気にはなれない」

にこ「うん。それは仕方ないね。悪いことじゃないよ」

高木「それでも、試してみたい。お前が信じてるあいつらの本気を」

にこ「ありがとう、琉生」

高木「俺も最後の新聞部員として、最高の仕事をするよ」

にこ「頑張ろうね」

高木「うん。で、あ、あのさ」

にこ「何？」

高木「明日、もし、その、最高の取材ができれば」

にこ「できれば？」

高木「言いたいことが、あるんだ」

にこ「ん？明日じゃなきゃ、ダメなの？」
高木「そう、そうなんだ。明日。だから、頑張ろう」
にこ「うん。私、頑張るね。じゃ」
荷物をまとめて去っていくにこ。
複雑な面持ちで見送る高木。

○演武会当日・体育館・開場前

吉野、伊藤、紗凧が柔軟体操でアップしている。
高木が控室前で合気道部の3人に声をかけに来る。
高木「今日の本番。しっかり観てるよ」
吉野「ありがとう」
伊藤「おす。新聞部の記事、楽しみにしてます」
紗凧「私、思い切って頑張ります。観ていてください」
高木「もちろんさ。俺だって全力で書くんだ。その一瞬を逃さない。それが新聞部のモットーだからな」

○同・開場時間

体育館には各校の道場旗が掲げられ、華やかな緊張感に包まれている。 観客席も保護者や関係者で埋まっている。
アナウンス「ただいまより、高等学校合気道演武会を開催いたします」
拍手が響き、にこは客席中央でカメラを構えている。

高木が隣に座り、ノートを広げている。
にこ「(カメラを覗き込みながら、小声)いよいよ、だね」
高木「(ペンを握りながら)お前も緊張してんじゃん」
にこ「当たり前でしょ。今日が私の3年間の集大成だもん」
高木「俺もさ。これが最後の現場記事だ。命懸けで書く」
2人は顔を見合わせ、頷き合う。

○舞台裏・待機室

吉野・伊藤・紗凧が深呼吸を繰り返している。
紗凧M「私は、絶対に最後まで先輩を信頼する。憧れてばかりだったけど、でも今日は、自分の足で立ってみせる」
道着の襟元を整え合う吉野と伊藤。
吉野「よし！いくぞ」
伊藤「おす！」
紗凧「先輩！私、先輩を信じてます」
和田「自信を持ちなさい。君たちは十分に護身を示せる。演武とは守り抜く美しさだ」
吉野・伊藤・紗凧「はい！」

○演武会・体育館

他校の演武が次々に披露されていく。
大人数の演舞に喝采が送られる。

観客席の応援も熱を帯びている。

アナウンス「続きまして、西多摩高校合気道部の演武です！」

パラパラとした拍手が起こるが、多くの観客は興味を示さない。

入場口から吉野・伊藤・紗凧が整然と現れる。

3人で正面に向かって一礼。

会場が静まる。

にこ「(ファインダー越しに呟く)さあ、最高の一枚を」

にこM「勝ち負けじゃない。でも、ここで何があったのかを、誰かに伝えたい。私が撮るのは、ここにいたっていう証拠。争わなくても、残るものがあるって証明したい」

○演武パート

ゆっくりとした呼吸音。

会場が静寂に包まれる。

まずは紗凧が吉野を受け流し、鮮やかに四方投げ。

吉野は柔らかく受け身を取り、美しい放物線を描く。

会場からどよめきが起こる。

観客A「すごいね、あんな小さい女子が」

観客B「と言うより技のキレが本格的だよ」

次は伊藤を小手返して投げる。

リズムは一切乱れず、柔らかさと力強さが絶妙に重なる。

高木「(ノートに素早く走り書きしながら)上手いな、これは」

紗凧は連続で技を決め続ける。

伊藤と吉野の受け身も流麗。

力強さと舞のような柔らかさが融合している。

観客がスマホで撮影を始め、SNS上のインプレッションが伸び始める。

演武はクライマックスを迎える。

紗凧が吉野と伊藤の両者を同時に引き込み、交差投げで2人を左右に投げ分ける。

両者が美しく同時に受け身を取り、畳に落ちる。

瞬間、にこの指がシャッターを切る。

体育館中から大拍手が沸き起こる。

高木「(拍手しながら小声)……やられたな。兄貴が見たら喜ぶよ」

にこ「え？」

高木「兄貴もうまかったんだぜ。演武」

にこ「今日、最高だったね」

高木「うん」

高木「ずっと許せなかったんだ、兄貴の怪我も、合気道も。でも、今日のあいつらを見て……なんか、少し救われた気がした」

にこ「そっか」

高木「兄貴にも見せたかったな、今日の演武」

○演武終了後・体育館控室前

出番を終えた吉野・伊藤・紗凧が、道着のまま笑顔で戻ってくる。

吉野「やりきったな！」

伊藤「夢みたいでした」

紗凧「(感極まって)私、できました！」

そこへ和田が静かに歩み寄る。

和田「本当に素晴らしい演武だった。ありがとう」

吉野・伊藤・紗凧「ありがとうございました！」

○体育館の外(夕)

にこと高木が並んで歩いている。

にこ「今日ホントにすごかったよね」

高木「すごかった。まさか、ここまでやるとはね」

にこ「最後にいい仕事できてよかった」

高木「うん、俺もだ」

にこ「それで」

高木「ん？何？」

にこ「あれは？何か昨日言いかけなかった？」

高木「え？何だっけ？」

にこ「ほら、取材が終わったら言いたいことがあるって」

高木「あれ？そうだっけ。なんか今日の演武会がホントにすごかったから、忘れちゃった」

にこ「そうなの？ホントに？」

高木「うん。そう」

にこ「もう、ホントにそれでいいのね？」

高木「うん」

にこ「わかった。じゃあね。バイバイ」振り返らず、去っていくにこ。

がっくりと肩を落としてにこを見送る高木。

○学校・中庭

後日の学校

掲示板に演武会の写真と新聞部の記事が並んで貼り出されている。

生徒たちが口々に賑わっている。

生徒A「合気道部、めっちゃすごいね！」

生徒B「廃部なんてありえないよね。残してあげればいいのに」

その様子を離れて眺める和田とにこ。

和田「想像以上の反響になったな」

にこ「ええ。合気道部、新聞部、写真部のみんなで搦んだ結果です」

和田「実は、学校が再検討をするといってるんだ」

にこ「え？」

和田「まだ、合気道部は廃部にならないかもしれない。影の副教頭の僕の力でね」

にこ「よかった。ありがとうございます。さすが影の副教頭」
にっこり笑うにこ。

○卒業式前日・昇降口(夕)

にこと高木が並んで歩いている。

高木「……ま、これで合気道部は存続するかもだな」

にこ「うん。琉生が余計なことしなかったから、ね」

高木「兄貴が、泣きながら記事読んでた。俺が書いた合気道部の記事をね」
少しの沈黙が流れる。

高木「なあ、にこ」

にこ「ん？」

高木「俺は…やっぱり今でもお前が」

高木、言い切らないまま、軽く笑う。

高木「いや、また今度にしとく」

にこ「また？また、次があるなんて思わないでよね」

高木「そう、だね。また合気道部の演武会でもあれば」

にこ「いいわよ。私もその時には写真とるし」

高木「……俺、お前のこと好きだった」

にこ「え？過去形？」

高木「フラれる前に、過去形にしといた」

にこ「ホント、バカね」

高木「バカなのは昔からだろ？」

にこ「……うん。でも、ありがと」

右手を差し出すにこ。

ゆっくりと握手をするにこと高木。

○新学期・柔道場

新入生たちが道場に見学に来ている。紗凧が中心となって演武を披露している。

伊藤は受け身指導を熱心に行っている。

紗凧「私も最初は怖かったけど、護身って信じることなのよ」

伊藤「おす。受け身を100回やれば体が覚えるよ」

和田「まだ、続いていくんだな。合気道部は、この居場所は終わらない」

和田の視線の先には額に入ったにこの写真が飾ってある。

一つは、演武での決め技の写真。そしてもう一つは、みんなで決めポーズをした時の写真。

（了）